



メールマガジン版 音楽の世界

第2号 日本音楽舞踊会議 (CMDJ) 2003年3月15日(土) 発行
The COMMITTEE of MUSIC and DANCE JAPAN
〒169-0074 新宿区北新宿 2-25-8 FAX 03-3369-7496
<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

メールマガジンの発行にあたって 事務局長：中島洋一

この度、メール・マガジン版『音楽の世界』を発行することとなりました。
こメール・マガジン発行の目的は、日本音楽舞踊会議とい団体およびその活動内容を紹介すること、
そして機関誌『音楽の世界(活字版)』の内容を紹介することが、主な目的ですが、それだけではなく、
読者に自由に投稿してもらい、それを分け隔てなく読んでいただく雑誌として発展させて行
きたいと考えています。

もちろん、この雑誌は申し込めば、どなたでも自由に購読出来ますし、購読の打ち切りも自由で
す。

発行回数など今後のことはまだ未定ですが、活字版『音楽の世界』の月刊に対して、このメルマ
ガ版『音楽の世界』の発行は不定期とし、大体年に5～6回程度の発行をめざしたいと思います。
文書の形式については画像などを簡単に取り込める長所があるHTML形式も検討しましたが、文
書サイズ、汎用性の両面を考え、テキスト形式でスタートすることにしました。

また、このメルマガは日本音楽舞踊会議関係者だけではなく、読者のみなさんと一緒に発展させ
て行く雑誌にして行きたいと考えておりますので、みなさま方のご協力をよろしく、お願い致しま
す。

このメルマガに記事を掲載したい人、また購読を進めたい人がおりましたら、事務局長にメールを
お送り下さい。

メールの宛先：中島洋一 yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp

+++++
メールマガジン版 『音楽の世界』第2号 内容

- 1) ごあいさつ
- 2) 日本音楽舞踊会議よりのお知らせ
会情報(新役員の名簿紹介)、『音楽の世界』最新号について
コンサート情報、研究セミナーについてのお知らせ
- 3) 『Fresh Concert -CMD-2003 ~より豊かな音楽の未来を求めて~』
出演者のコメント
- 4) デイミトリー・ショスタコーヴィッチ 『ある学生への手紙』 助川敏弥訳
- 5) 日本音楽舞踊会議の内情(1) 『Echo(エコー)』を巡って 中島洋一(作曲)
- 6) 音楽会評 助川敏弥、畑山千恵子

宮谷理香ピアノ・リサイタル 助川敏弥
NHKニューイヤーオペラコンサート 畑山千恵子
杉谷昭子 ベートーヴェン・ピアノソナタ全曲演奏会 畑山千恵子
二期会「カルメン」 畑山千恵子
東京フィルハーモニー交響楽団 第671回定期演奏会
オール黨プログラム 畑山千恵子

+++++

1)《ごあいさつ ----第2号----について》 中島洋一

創刊号発行から、2ヶ月半を経てメールマガジン版『音楽の世界』第2号を発行する運びとなりました。

第二号は3月19日(水)に開催される『Fresh Concert -CMD2003- ~より与太かな音楽の未来をまざして~』の特集号的意味合いを持たせ、コンサート徳前に発行することにいたしました。必ずしも『Fresh Concert』関連の記事は量的に十分ではありませんが、このメール・マガジンをお読みになった方々が一人でも多く、角筈区民センターに足を運ばれて、未来ある若い音楽家の方々の演奏を聴き、励ましていただけたら幸いと存じます。

それから私事で申し訳有りませんが、前回掲載した『私と電子音楽の関わりについて』に対して、少数の方々ながら続編を望む声がありました。実は、1991年~98年の8年間は、国立音楽大学内部で起こった事については、今の段階では事実を書くことを自粛すべき事情がございます。しかし、電子音楽設置推進会議が発足した1985年から、私が渡欧する89年までは、ある程度執筆が可能と思いますので、第3号でまた取り上げたいと思います。また、現在進行形の現時点以降の状況については、折りあるごとに、お伝えできるものと思います。

第二号は投書者が少なく、記事も件数からみると少な目なのですが、その中でも各々の読者諸氏にとって興味を惹くものがございましたら、じっくりお読みいただきたいと存じます。特にショスタコーヴィッチ『ある学生への手紙』は、この大作曲家の謙虚さ、才能を認めた学生に対する深い愛情と誠意を持ったアドバイス、そこに、彼の誠実な人柄と芸術に対するひたむきな姿勢を感じることが出来ると思います。

今回は書き手の人数がやや少ないという問題もございましたが、第三号以降については、事前にもっと準備して、より充実した内容を目指す所存でございます。

+++++

2) 日本音楽舞踊会議よりのお知らせ

A) 2003年度の新役員が以下のように決まりました。

本会役員

代表委員：助川敏弥、深沢亮子

事務局長：中島洋一 事務局次長：松山元、渡辺文子

機関誌編集長：野口剛夫 / 公演企画部長：北條直彦

財政部長：高島和義

会計監査役 ないとう ひろお、中島良能

事務局執務 渡辺文子、上村真理

運営委員(現時点で18名まで決定)

中島洋一(作曲)、深沢亮子(ピアノ)、助川敏弥(作曲・評論)

北川暁子(ピアノ)野口剛夫(研究評論・指揮)、北條直彦(作曲)

高島和義(オーディオ)、米持隆之(ピアノ)、高橋雅光(作曲)

金子恵美子（声楽）、西山淑子（作曲・エレクトーン）、
松山 元（ピアノ）、渡辺文子（ピアノ）、戸引小夜子（ピアノ）
北川靖子（ヴァイオリン）、木幡由美子（作曲）、
金原礼子（研究・声楽）、太田恵美子（ピアノ）

部会役員

ピアノ部会

部会長：新井知子、副部会長：池田潤子

会 計：戸引小夜子、企画相談役：北川暁子

声楽部会

部会長：佐藤光政、副部会長：嶋田美佐子、浅香五十鈴

会 計：芝田貞子

作曲部会

部会長：高橋雅光、副部会長：木幡由美子、西山淑子

会 計：山下希夫、相談役：中島洋一

研究部会

世話人：湯浅玲子、相談役：助川敏弥

例会会場提供者：金原礼子

弦部会

部会長：安田謙一郎

B) 『音楽の世界』最新号について

(主な内容)

論壇 自分の音、そして自分の生き方（中島洋一）

座談会 【Fresh Concert - CMD2003 - 】出演者が自分の音楽を語る。

演奏者側出席者

岩間俊恵、植田さや香、小道一代、戸田竜太郎、

松浦豊彦、吉松亜衣、山口有希子、

日本音楽舞踊会議側出席者

野口剛夫、松山元、司会：中島洋一

特別読物 サンライズ・サンセット（助川敏弥）

好評連載 CDマニアのひとりごと（小山田豊）

音楽家のためのオーディオ嘶（高島和義）

音楽のあるレストラン（カヤグム【韓国家庭料理】）

《演奏会プログラム》

【Fresh Concert - CMD2003 - 】～より豊かな音楽の未来をめざして～

ピアノ部会第17回公演 20世紀・音の潮流

1925～1950年頃の音楽 - 新古典主義を中心に -

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kikanshi/saisin.htm>

なお、『音楽の世界』3 / 4月号については【Fresh Concert - CMD2003 - 】にご来場の皆様には、プログラムとして無料配布する予定です。

C) コンサート情報、研究セミナーについて

近未来に開催される会主催コンサートについてのみ掲載

20日(木)『20世紀・音の潮流』世紀末～1930 ピアノ部会第17回公演
すみだトリフォニー 小ホール(JR錦糸町) pm.7:00～
全席：3000円(会員=無料)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con02.htm>

【2003年4月】

7日(月) 声楽部会「サロンコンサート パート」
～林檎の花の咲くころに～
日暮里サニーホールコンサートサロン 19:00～
出演者：小室由美子、渡辺裕子、佐藤光政、
ピアノ伴奏坂田晴美

【2003年5月】

17日(土)「唱歌・童謡100年の歴史を訪ねて パート」
公演企画部主催、三部会合同コンサート シビックホール

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con15.htm>

公演企画部主催研究セミナー

【2003年3月】

24日(月) 第5回セミナー 日本語の旋律化について(5)
(木村雅信、佐藤光政講師)
1900～21:00 スタジオ ヴィルトゥオ - ジ

31日(月) 第6回セミナー 現代ロシア・ピアノ音楽の研究 (中島克磨講師)
1900～21:00 スタジオ ヴィルトゥオ - ジ

スタジオ ヴィルトゥオ - ジの住所は以下の通りです。
STUDIO VIRTUOSI (スタジオ ヴィルトゥオ - ジ)
JR大久保・新大久保駅より徒歩5分 03-3362-6482
〒169 新宿区百人町2-16-17 アバンティ21内-B1

地図：<http://holz.fureai.or.jp/Renshu/Virtousi.html>

+++++
3) 『Fresh Concert -CMD-2003～より豊かな音楽の未来を求めて～』
出演者のコメント

《吉松 亜衣(ソプラノ)》

今回はこのような演奏の場がただでさえ大変嬉しく思っています。まだまだ勉強中で、自分がどれだけのものを表現できるかわかりませんが、良い演奏ができるように精一杯頑張ります。

将来は、今回のような大きなホールでの演奏はもちろんですが、音楽に触れる機会の少ない地方の学校や公民館などで歌ったり、誰でも気軽に聞きに来てもらえるような小さい規模のコンサートを開いたりして、より多くの人に音楽を楽しんでもらえるような活動もしていきたいと考えています。

《松浦豊彦（バリトン）》

”自分にとって最善の演奏ができることが常に目標です。”

《湯原拓哉（チェロ）》

1月の中旬に出演させていただくことが決まり急いで選曲し練習を始めました。
2ヶ月という短い間だったので、まだ未完成の部分もあると思いますが、精一杯演奏します。

《植田 さや香（ピアノ）》

音楽について言葉で語るのは苦手なので、演奏を通してお伝えできたらと思っています。

《岩間 俊恵（ピアノ）》

前回の座談会でもそうでしたが、自分の演奏について言葉で語るというのは非常にやりにくく、苦手な作業です。できるだけ近い表現を探そうとしても、私の数少ないボキャブラリーでは、言葉を搜しているうちにどんどん違うものになってしまうような気がします。かと言って、言葉以上に語れる音楽をしているのか...というところはまだ未熟なのですが、目指す所はそういう音楽だと思っています。

自分自身に対していつも誠実でいたいです。

コンサートまであと僅かとなりました。

よいものができるよう、頑張ります。

《戸田竜太郎（クラリネット）》

どんなことを書いたら良いのだろうと悩んでしまってこんなに遅くなってしまいました。

このクラリネットソナタは、器楽のためのソナタには珍しく、ピアノとソロ楽器が対等の立場で描かれておりますので、『クラリネットにピアノ伴奏』というよりは、『ピアノとクラリネットのアンサンブル』として聞いていただけたら、と思います

《山口有希子（ピアノ）》

最後まで競演者と変わらない温度で演奏が出来るように、と思います。

《高波亜由実（ピアノ）》

『Fresh concert』に参加することを楽しみにしています。

学校を卒業してしまいますと、自分の演奏をするステージが減ってしまい、とても残念に思っていました。

そんな時に中島先生に声をかけて頂き、嬉しく思いました。

この『Fresh concert』のステージを大切にしたいと思っています。

《小道一代（こみち・かずよ メゾ・ソプラノ）》

アメリカへ行くまでコープランドの歌曲の事は知らなかったんですけど、彼の歌曲を歌ってみて美しいなと思いました。有名作品としてはディキンソンの「12の詩による」というのがありますが、今回は【古いアメリカの歌】第一集、第二集の両方から自分が好きなものを4曲選びました。

歌うたびに新しい発見があるんで、今回も新しい発見が出来たらいいなと思って選ばせてもらい

ました。

今回は、たまたま英語の曲なんですけど、私はオペラとか、ドイツ歌曲とか色々なジャンルのものをやっています。でも最近、基本的には一緒だって思うようになって来ました。基本となるものを崩してしまえば、すべてがまやかしくなってしまう。最近、基本さえしっかりしておけば、どんなジャンルのものでも、自分の感性さえついていけばなんとかなると思うようになって、ですからあまり垣根を作らないようにしようと、考えるようになりました。

アメリカで生活していたのは10年前のことですが、ここに来て、自分のアイデンティティーの一つとして、アメリカのものを出して行ってもいいかなと思うようになりました。作品に深い愛情を込めて、精一杯歌うつもりです。

出来るだけ多くの方々の、ご来場、ご拝聴を賜りたいと願っています。

+++++

4) デイミトリー・ショスタコーヴィッチ 『ある学生への手紙』

助川敏弥訳

デイミトリー・ショスタコーヴィッチとエディソン・デニソフは、1948年以来、文通していた。シベリアのトムスク市に住む20歳の数学学生は、作曲家になりたいという願望について、当時まだ面識がなかった作曲界の巨匠に手紙で意見と助言をもとめた。以下は二人の往復書簡からショスタコーヴィッチの手紙である。

モスクワ、1950年2月28日

エディック！お手紙受けとりました。あなたの音楽への傾倒と、音楽家になりたいという願望を大変嬉しく思います。しかしながら、こういう重大な決定（音楽院で勉強したいという）をする前に、私からのお願いですが、あなたの作品を送って下さい。もし、楽譜が一部しかない場合は必ずコピーをとって、コピーの方を送って下さい。あなたに才能があるかないか、それを私一人が決めることが正しいと思えません。ですから、この点について私よりも経験が豊富な人たちの意見をきいてみようと思います。その後、音楽院への入学と、作曲家になることの妥当性についてご返事することにします。

モスクワ、1950年3月12日

エディック！作品を拝見、驚きました。もしもあなたが基礎的な勉強をして、これだけ、手法的に比較的確実に作曲することを理解しているとすれば、感嘆するほかありません。とにかく次の質問に答えて下さい。

1. いままでどういう音楽的な教育を受けましたか？
（理論の知識、聴音訓練、和声学、楽器法、等々）
2. ピアノがよくひけますか？
3. いま何歳ですか？
4. ファースト・ネームとお父上のお名前は？

あなたの作品の多くのものは大変気に入りました。あなたが並々ならぬ作曲の才能を持っていることを私は信じます。この才能を埋もれたままにすることは大きな罪であると思います。しかしながら、作曲家になるためには、当然ながらもっともっと多くのことを勉強しなければなりません。技法だけではなくもっと別のこともです。作曲家とは、気に入ったやり方で旋律に伴奏をつけて曲に仕立てるとか、形よくオーケストレイトするとか単にそんなものではありません。そんなことは、失礼ながら、幾らかでも音楽の素養のある人なち誰でも出来ます。作曲家とは、もっと意味深く偉大なものです。もしあなたが、過去の巨匠たちが残した豊かな遺産をよく勉強するならば、作曲家と

は何であるか分るでしょう。あなたと一度会って、こうしたことについてお話ししたいものです。ただし、お断りしなければなりません。私は大変話しが下手です。あなたの作品の中には、あなたの才能を信じさせるものがあります。私にはそれを分析することが出来ません。それは、私の実感から来るものです。もっといえば、あなたの作品からそういう印象を持つのです。それはそれとして、あなたの作品について私の意見を述べておきます。

(ここで、ショスタコーヴィッチは、送られてきたデニソフの初期の作品について、かなりきびしい速慮のない意見を書いている)。

大急ぎであなたの作品を見てきました。詳細な分析ではないし、また、全面的な検討でもありませんが、どうか気をわるくしないで下さい。そういうことは私には出来ません。しかし、またしてもある疑問が生じてきます。それは、この手紙の始めであなたに書いたことです。あなたはどのような音楽の勉強をしたのですか？もしもあなたが、さしたる専門的勉強もしたことがない音楽の初心者であるなら、ここに送られてきたものはことごとく、驚異というべきものであり、また人を興奮させるものです。なぜなら、確実な勉強をしたことがない人が「組曲」や「ガボット」のようなスコアを書くということは有り得ないからです。もし本当にあなたが専門の勉強をしたことがないなら、あなたは、通常の例をはるかに超えた大変な例外現象であるというほかありません。

ここで、特定の部分について、もし作曲者がそれまで専門の勉強をしているなら、作曲技術上の欠陥についての慎重な指摘がなされている。それは、ショスタコーヴィッチがこれに続く手紙の交換の中で繰返し言及しているように、旋律についていまだ少し注意深く考えること。また、もっと、鋭く、緻密に、内容的な豊かさを心掛けて作曲することである。

モスクワ、1950年4月5日

エディック！あなた個人の資料と、あなたの作品に対する私の見解へのご返事を含めた二通のお手紙うれしく拝見しました。私の見解にあなたが反論していること、また、あなたが自作を擁護しようとしていること、私はたいへん快く読みました。つまり、あなたは自分の作品を愛しているのです。あなたの良き志の現れです。あなたが作曲家になるであろうことを物語っています。まともな作曲家は自分の仕事に愛着を持つものです。

しかしにもかかわらず私は自分の見解に固執します。そして、あなたの作品に一連の重要な欠陥を指摘しないわけにはいきません。それらは疑いなく時間により解決されるでしょう。あなたは、今後どうすべきかについて私の指示を求めてきました。疑いの余地のないあなたの才能は、あなたが作曲家になるであろうことを私に確信させます。しかし、いまの大学が後一年残っているのなら、どうか大学の勉強をやりまてすませて下さい！作曲家の道はイバラの道です(俗な言い方ですが)。私はそのことを自身で経験してきましたし、また今も経験しています・・・

ぜひあなたとお会いしてお話ししたいものです。多分トムスクへいく機会があるでしょう。あるいは、あなたがモスクワへ出てきますか。もしモスクワへ来られる時はぜひ前以てご一報下さい。私の電話番号を書きとめておいて下さい。

この後ショスタコーヴィッチからの手紙が続き、その中で、デニソフがどの教授に師事出来るか、あるいは師事すべきか、また、入学試験の状況、住宅事情の難しさなどについて触れている。1950年4月22日付

モスクワ、1950年5月6日

エディック！私の手紙があなたを傷つけたことは残念です。あなたを傷つける意図は全くありませんでした。ただモスクワに住むとなると発生する困難について指摘したかっただけです(生活費や住居の問題等々)。こうした問題は余り抒情的な瞑想には適しません。現実的で散文的な問題です・・・私はいまこういうことを考えています。あなたの作品を何人かのモスクワの音楽家に見せ

たいのです。中でも、シェパーリン、ボガトリョフ、アレクサンドロフ、などなどの人たちです。多分彼等はそれぞれの見解を述べてくれるでしょうし、それは、あなたにとって入学試験の先取りのようなものになるでしょう。

あなたが音楽院に入りたいと考えたということは、合格が間違いないという確信を持っていることだと思います。個人的には私は全くそのことを疑いません。しかし私は、試験官が誤りを犯した幾つかの例を記憶に持っています。そうです、かつて、大変な才能であるユリー・スピリドフがモスクワ音楽院の入試に不合格となりました。レニング・ラート音楽院は、かつて、才能ある作曲家、ガリーナ・ウストオルスカヤとユリー・レピティンに不合格にしました。この二人の場合、私は、尊敬する同僚と大激論をしました（当時私はレニングラード音楽院で教えていました）。

この手紙が届いたらどうか電報を下さい。あなたの作品を人に見せることに同意されるかどうかご返事下さい。あなたの同意なしに他人に見せるわけにはいきませんから。

デニソフはすぐに電報を打った。ショスタコーヴィッチは彼の作品を、セミヨン・ボガトリョフとウィザリオン・シェパーリンに見せた。彼等はどれも余り強い印象を受けなかったようである。ショスタコーヴィッチは、なおデニソフに音楽院入試に努力しようとの進言を流けた。

カマロヴォ、1950年7月2日

エディック！すでに書いたように、影響力の大きな教授の一人は、あなたの作品に割にきびしい意見を述べました。その人の同僚も同しようにあなたにきびしいことが想像されます。そういうことになれば、あなたは、荷物をまとめてトムスクに帰らなければなりません。しかしそうしている内にも、あなたは今の大字を卒業するでしょう。そして何かをして生活していかなければなりません。モスクワに転居することは大変です。もしあなたが、どうしてもそうしたいのなら、私はありったけの経験を動員するし、あなたに、必要な限りの理性的な助言を送ります。今はただ、神様がどういう結果をあたえるかを待つばかりありません。

デニソフは1950年、モスクワ音楽院の入試に失敗した。

カマローヴォ、1950年8月22日

エディック！詳細なお手紙有難う。ご返事が遅くなりました。実はカマローヴォに帰ってからしばらく病気で手紙が書けなかったのです。最初の挫折にどうかくじけないで下さい。もともと、あなたは強い人であること、そして、不愉快な出来事によって打碎かれるような人ではないことを私は信じています・・・

デニソフはトムスク大字での数学科の学部を終了した。

モスクワ、1951年4月29日

エディック！今日、お手紙とどき、大変うれしく拝見しました。卒業試験に合格、ふさわしい成果をあげられたことをお祝いします。私の生活もようやく外見上は正常な軌道にもどりました。一週間前モスクワに戻りました。ここに永住するつもりです。当分どこにも旅行しません。演奏旅行はうまくいきました。ミンスク、ウィルナ、リガへ行って、リガからモスクワへ帰りました。そして、ソ連邦ロシア共和国最高会議に出席のためレニングラードへ行ってきました。

近況をお知らせください。手紙を忘れずに書いて下さい！時間があったらピアノに向かうように。特に初見の練習をして下さい。私の「プレリュードとフーガ」はまだ作曲家連盟で議題になっていません。多分数日の間に結論が出るでしょう。結果がどうなったかお知らせします。

カマローヴォ、1951年7月26日

エディック！しばしばあなたと最後にお会いした時のことを思い出しています。あなたの目覚ましい大学の卒業論文のことを思い出します。だから、あなたのことを頻々と考えるのです。あなたは、人生で最も難しいほんとうに難しい時期を乗切ったのだと思います。あなたの前には科学者としてのあちゆる道が開かれています。あなたは大学院に進まれるでしょうし、私の考えては、三年以内に科字者会議の候補になるでしょう。そしてしばらくすれば学位もとるでしょう。こうしたこと全てが5年から10年の内に起るでしょう。

もう一つの面では、あなたの優れた音楽の才能が引出されています。あなたは作曲家になりたがっているし、その才能もあります。あなたは第一歩から始めなければなりません。

音楽院の勉強のために5年間で過ぎます。この短い間に、あなたの才能が完全にはいわなくとも、目覚ましい程に開花するでしょうか。あるいは勉強が終る時に、あなたの持っているものに僅かなものが付加わるだけになるでしょうか？

あなたのことを考える時、私の頭には何人かの作曲家の伝記が浮かぶのです。ポロディンは全生涯を通して化学者でした。その僅かしかない自由な時間を音楽に捧げたのでした。リムスキー・コルサコフは熟年に至るまで海軍将校でした。音楽の勉強は、彼が、全面的に生活を音楽に向けるようになった時初めて可能になりました。中級作曲家のセザール・キュイは生涯を通して学者でした（確か建築学）。リスト、ショパン、パガニーニは卓越した演奏家でした。そのほか多くの例があります。こうした例を考えて下さい！

科学者を放棄して作曲家でだけありたいと本気で考えますか？

多分ポロディンの道があなたにもっとも適しています。音楽の技法（和声学、楽器法、対位法、等々）は音楽院でなくても習得出来ます。いまは「学者の道」をお選び下さい。この手紙で気をわるくしないで下さい。あなたへの大きな好意で書いたのですから。どうか元気でお手紙を下さい！

D . ショスタコーヴィッチ

- - - - - 終り

+++++
5) 『日本音楽舞踊会議』の内情(1)

『Echo (エコー)』を巡って 中島洋一(作曲)

日本音楽舞踊会議(以下音舞会と略称)の正会員ならよくご存じのことと思いますが、音舞会の発行物としては、機関誌『月刊:音楽の世界』の他に、毎月発行される『エコー』があります。これは正会員に会の情報や会員の個人情報を紹介する内向きの広報誌です。この『エコー』がいつ頃から始まったのか音舞会発足時からの会員の方にお聞きしないと確かなことは申せませんが、おそらく40年前に会が発足したのとほぼ同時に発行を開始したものと思われます。いまでこそ、『エコー』はその時代の事務局長が執筆・編集することが慣わしになっていますが、その慣わしが定着していない時代もありました。

私が入会したのは1987年のことですが、当時の故寺原伸夫事務局長時代には、事務局次長の中島克磨氏や、機関誌局長の助川敏弥氏(現代表委員)などの方々が執筆されていたようです。しかし、非常に短い期間ですが、89年2月に私は名前だけでよいからという条件で機関誌局長に就任しており、助川氏の依頼を受け89年2月~6月号のエコーを助川氏からバトンタッチして執筆しております。『Echo』という見出し文字の左に、カット絵を挿入するようになったのはその時からです。私は当時すでに文書作成にパソコンを使うのが習慣になっておりましたから、当時のファイルもそのまま残っており、今でも内容を見る事も公開することも出来ます。当時、ミスが多い私の文章の校正役を引き受けてくださったのが故石野富士江さんでした。

私はその年(89年)の7月に渡欧し、7月号からはどなたが執筆したか、存じ上げませんが、おそらく助川氏か中島克磨氏だと思います。私は7月20日に渡欧し、オランダのハーグを拠点に90年8月中旬までヨーロッパに滞在し、その後渡米し、91年4月1日に帰国しました。

その間、当時の編集長の助川氏からの依頼で、『オランダ日記』、『アメリカ日記』を執筆し滞在地から送り、『音楽の世界』に掲載していただきました。

また、90年3月には音舞会の方々が渡欧し、スケジュールの都合で皆様方と当地でお会いする事は出来ませんでした。1990年3月24日(土)の日誌に「イギリスのタワー・ホテルへ滞在している助川敏弥さんにも電話。ヨーロッパの事情や音舞会のことなど話す。」という記録が残っています。私の渡欧中に「帰国したら事務局長を引き受けてくれ」というお話があり、「帰国したらおそらく超多忙になるので」と、いったんはお断りしたような気がしますが、「それは判っているが、出来るだけ負担をかけないようにするから」というお話しで、お引き受けすることにしました。ところが、実際は帰国後は大学において超多忙とはならなかったのですが、その頃の複雑な事情につきましては今はお話しできません。逆に、今度こそ超多忙になる現時点で、再び事務局長をお引き受けしなくてはならなくなったのは、皮肉な巡り合わせです。

ところで91年4月に帰国後、2ヶ月遅れて事務局長の執務を始めました。帰国前の2ヶ月は次長の中島克磨氏が代行してくれていたものと思います。そして91年5月号から事務局長として『エコ』の執筆を再開いたしましたが、まだ、帰国時に米国から船便で送った私のパソコンを含む引っ越し荷物が届いておらず、5月号は義弟のパソコンを借りて執筆しました。

92年4月号までは、使い古したドットインパクトプリンタ(購入時は30万円もしました)で印刷しておりましたが、ドットインパクトプリンタが古くなり不具合が生じたので、新しくレーザープリンタを購入し、5月号からはそれを使いプリントアウトしました。それで印刷がずっと綺麗になったと思います。

『エコ』で思い出すのは、93年頃あった『小選挙区制』を巡る大論争です。私は当時、同じ政治思想の旗の下に集まる《一致団結型の組織》から、異なった様々な思想信条、芸術的方向性の共存を認める《不一致協力型の組織》へ明確に脱皮をめざすべきと考えていました。と申しますのは、すでに音舞会は創立時とは異なり、多様な考えを持つ人々の集まりになっていたのです。

『小選挙区制』については、会として反対声明を出すべき、との意見もありました。しかし、単純に『音楽の世界』などに『小選挙区制反対』という声明文を出してしまうと、外部の人々に音舞会の会員はみんな殆ど同じ考え方しているとの誤解を与え、一種の思想統制をしてしまうような結果になり、いわゆる悪い意味の一致団結型の組織に逆戻りしてしまいます。それに、単に賛成、反対ではなく、同じ反対にしても、個々の会員によって、考え方が微妙に違うはずで、それで、『エコ』の論壇で、会員の意見を募り、紙上論争を展開することにいたしました。今なら、インターネット、メール上で、相手の意見にすぐ反論できます。しかし、月刊紙エコでは反論は翌月になってしまいます。一番困ったのは、中には長大な文字数に及び意見もあり、それをパソコンに打ち込む作業が大変だったということです。

それでも、『言論・表現の自由』というものを、会の運営の柱にするということで、その後も、どんなに長文な意見でも、全文を公開するように頑張りました。ところが、だんだん特定の人への投書だけが目立つようになって行きました。なかでも、正岡泰千代氏の文章は毎回長大で、しかも、あまり綺麗でない文字でギッシリ書かれており、打ち込みミスをする、当人からお叱りを受けます。「エコで、表現の自由を維持するのは大変だ、事務局長とは寄せられた文章の打ち込みに時間を費やすコンピュータ奴隷のような役まわりなのかな」と思ったりしました。その頃(94年頃)いままで、私を支えてくれていた中島克磨氏が仕事の都合で、次長の仕事を殆ど出来なくなり、私の方は『コンピュータ奴隷』となり、他の必要なことにエネルギーを注ぐ事が出来なくなり、前回の事務局長就任時において、最後の2年間は、会員のみなさんにご迷惑をおかけしました。

私が96年2月に5年間務めた事務局長の役を退いた後、中島克磨氏が4年間、事務局長を務められました。その時は中島克磨氏と次長の米持隆之氏、金子恵美子氏の三人で分担してエコを執筆したのではないかと思います。最終的なレイアウトは誰がやったのか聞いてみないと判りません。2000年3月から2002年2月までは、助川敏弥氏(現代表委員)が、事務局長に再任されました。再任と書いたのは、私が入会する以前、1982年から2年間事務局長に就任され、常勤職員制を廃止し、事務局執務体制をいまの会員のボランティア活動による自主管理制に改める大改革を実行されました。助川氏は非常に有能な方なので、エコもご自分一人でお書きになり、経費削減もあり、メールアドレス所有者に対してはメール版『エコ』を送るよう改めました。それは経費削減の効果をもたらしましたが、会広報紙の条件として必要な速報性を高めるという効果

もありました。

その後、2002年3月からは、再び私が引き継ぎましたが、基本的にはメール版と、印刷板の両方を発行するという助川路線を継承しております。

また、会としてはニュートラルな姿勢を維持し、その代わり各々の個人の主義、主張を最大限に認め、違いを超えて互いに協力し合う、という私が目指した《不一致協力型路線》は、中島克磨前々事務局長、助川敏弥前事務局長、そして、再任されされた私の代へと、基本的にはずっと貫かれて来ていると思います。

ところで《不一致協力型体制》の言葉のイメージの源になったものは何かと申しますと学生時代に読んだフランスの作家カミュの『ペスト』という小説だったと思います。読んだのは大分昔のことなので、断片的な内容しか思い出せませんが、性格も、職業も、考え方も全然異なる市民達が、みんなで協力し合って疫病の『ペスト』を撃退する、といった内容だったように思います。勿論『ペスト』は寓意であり、それは『ナチス』を表し、フランスの反ナチ抵抗運動を書いたものでしょうが、読んで非常に感動した記憶があります。

ここで話を変えますが、かつて『小選挙区制』で行われたような大論争をどこで行うかということですが、それを『エコ』紙上で行う時代はもう過ぎたと思います。限定された会内の人々の間で、芸術問題や政治問題について論争しても、内輪な自己満足に終わってしまい、さしたる進展は望めないでしょうし、それに正直言って超多忙な私が、また打ち込み役をやらされては、私は死んでしまいます。勤務先、音舞会を問わずコンピュータが絡む雑用を手に余るほど引き受け、「なぜパソコンなんか習得してしまったのか、これでは自分の芸術どころではないではないか！」と恨めしく思うような状況が続いておりますし。

そこで、論争を行うのに一番相応しいのは、インターネット上だと思います。会員に限らず、色々な意見をお持ちの方は、音舞会の掲示板にお書き込みいただきたいと思います。もし、必要なら『芸術問題』をあつかうもの、『あげます、もたいます』のような日常生活を扱うもの、『時事問題』を扱うものなど、複数の掲示板を作ることも可能です。

それから、このメール版『音楽の世界』については、原則としてあらゆる方がの寄稿を認めますので、題材はなんでも結構ですので、どんどん寄稿していただきたいと思います。

+++++

6) 音楽会評 助川敏弥、畑山千恵子

助川敏弥の会評

< 音楽会評 >

宮谷理香ピアノ・リサイタル
大きな対比を含む、前半と後半の演奏

宮谷理香は、1995年、桐朋学園大学在学中に第13回ショパン・コンクールで第五位を受賞、突如注目を集め、以後、国内外で盛んな演奏活動が続ける新進である。2001年から「宮谷理香と廻るショパンの旅」と題する演奏会シリーズを始め、今回はその三回目にあたる。この企画は2010年のショパン生誕200年での完結を目指して、10回が計画されている。このシリーズのほかにも自主リサイタルを開き、旺盛な演奏活動を披露しているが、ショパン以外に、ベートーヴェン、シューベルト、ヘンツェを拡大、今回はモーツァルトに取り組んだ。今回の曲目は、前半がモーツァルト、後半がショパン。モーツァルトは、幻想曲八短調、K475、ソナタ八短調、K457。

後半はショパンの四つのスケルツォであった。

総論としては、前半と後半にかなりの演奏の質的な違いがあり、別人の趣きすらあった。結論としては後半のショパンの方が問題なくすぐれた演奏であったが、モーツァルトには様々な思考の課題を残した。しかし、それはあながち否定的な現象だけではない。この日のモーツァルトは、何故か平面的で、円山応挙以前、遠近法を取り入れる前の日本画の世界に似ていた。ていねいに画かれた素面には清められた日本の住居の趣きがあり、西洋の美学には存在しないものがある。しかし、デモーニッシュな影はそこにはなかった。モーツァルトの音楽には、平穏な風景の中に、時折り何かの影が素早く寄切る、そんな瞬間がある。それはなかった。しかし、こういう演奏様式が、西洋音楽の未消化と言い切るだけでいいものかどうか、近年疑問も湧くのである。日本人独特の世界を創造する結果になるかもしれないのだから。その結果は、まだまだかなり長い時間の後でなければ分からないだろうが。ここに無くて西洋音楽にあったものは、本来無音の世界にはじめて音が鳴る、その戦慄すべき瞬間と意味を捉

えることであろう。ジョン・ケージの「無音の作品」が問いかけたこともそれに違いない。演奏も作曲も、音楽の実践は文学論的談義で出来るものではない。こうした課題を演奏の実技の中でどう捉えていくか、困難ではあるが、避けられない、また甲斐ある仕事であることが当人が自覚することである。

後半のショパンはスケルツォ四曲、すべて見事な演奏であった。ここにはモーツァルトに現われなかった悪魔的瞬間も息づいていた。それぞれの音は時の疾風の中で閃光を放ち、平面に書き込まれていない。本来、日本人には無縁の三拍のリズムが持つ生命的躍動と、激しい強弱の対比の世界、そうしたものが、ここでは申し分なく再現されてきた。性格が酷似した四つの曲を典型的にならずに演奏したことも十分に賞賛されるべきである。この演奏家の課題は、この秀逸な再現能力を普遍化することであろう。ショパンでは練達の技術によって制御され適切だったペダル効果がモーツァルトでは瞬間の緊張を消去させる結果ともなっていたことも事実である。ロココとロマンの様式の違いは美学の違いであり秩序の違いでもある。この人の出発点はやはりショパンであったのかもしれない。ロマン派から、ロココ、古典、バロックと時代を朔行するに従い、感情の表現が様式によって規制されるようになり、そして別な美的秩序が登場して来る。この人はいま新しい地平への旅路にある。

(3月2日 朝日浜離宮ホール) 助川 敏弥

畑山千恵子の会評

NHKニューイヤーオペラコンサート

新春恒例のNHKニューイヤーオペラコンサートは、今年で46回目を迎えた。日本のオペラ、声楽会で活躍する歌手たちが自分たちの得意とするレパートリーを中心に「歌い初め」をするコンサートとして、NHKのラジオ、テレビで放送されることによって広く親しまれてきたことは言うまでもないだろう。また、音楽愛好家たち、ことにオペラ愛好家たちにとって、このコンサートに出演した歌手たちがこの一年でどのような活躍をするだろうかと期待をよせて、この舞台を見守っていることだろう。

今回は、日本のオペラ史100年記念ということで、内藤剛志、竹内陶子の司会で進められた。両者の司会は、ユーモア、ウィットにとんだ語り口で、交換が持てた。

まず、注目のテノール、ジョン・健・ヌッツォ。モーツァルト「魔笛」から、タミーノのアリア

「なんと美しい絵姿」を格調高く歌った。今、もっとも充実した時期にある。これからも真摯な姿勢を貫いてほしい。澤畑恵美、釜洞裕子、緑川まりの歌唱も忘れがたい。福島明也、直野資といった男声陣も健闘した。ことに、直野がブッチーニ「トスカ」からの「テ・デウム」で見せた歌唱は、悪役スカルピアそのものといったおぞましさを伝えていた。ロシア・オペラでは、チャイコフスキー「エフゲニ・オネーギン」からの「わたしは死んでしまいそうだ」を取り上げた川副千尋の歌唱、リムスキー・コルサコフ「サルタン皇帝の物語」から「皇子さま、わたしの救い主」を取り上げたヒブラ・ゲルスマーヴァの歌唱が印象に残った。

中国のソプラノ崔岩光が歌ったブッチーニ「トゥーランドット」から「氷のような姫君の心も」は、中国を舞台にしたオペラだけに聴き応え十分であった。佐藤美枝子がドリーブのラクメでは見事なコロラトゥーラを聴かせた。ヴァーグナー「ニュルンベルクのマイスタージンガー」から「朝はばら色に輝き」を歌った福井敬は昨年の二期会での公演をほうふつとさせるできばえだった。ブッチーニ「トスカ」から「星はきらめき」を歌った市原多朗も忘れられない。最後をしめくくった佐藤しのぶは、ヴェルディ「運命の力」から「神よ、平和を与えたまえ」で、死に臨むヒロイン、レオノーラの心境を歌い上げていた。

なによりも小林健一郎の指揮が全体を引き締めていた。また、歌手たちの持ち味を生かしていたことも特筆したい。東京フィルハーモニー管弦楽団が小林の指揮にこたえて、素晴らしい演奏を聴かせたことは大きい。二期会合唱団、藤原歌劇団合唱部の力強い合唱も花を添えた。今年は、ロシア・オペラでは、キーロフ・オペラの来日公演では、プロコフィエフ「戦争と平和」が日本初演されるという。ミラノ・スカラ座、その他、来日公演がいくつかあるという。国内オペラでは、二期会がリヒャルト・シュトラウスを取り上げるなど、話題が多い。さて、どのような結果になるだろうか。

1月3日 NHK ホール

杉谷昭子 ベートーヴェン・ピアノソナタ全曲演奏会 第2回

2002年3月に始まった杉谷昭子のベートーヴェン・ピアノソナタ全曲演奏会は、第2回目となった。今回は、作品49の2曲、作品10の3曲、作品13「悲愴」が演奏された。

まず、作品49の1, 2. この2曲は、本来初期の作品群に属するものだが、どうした訳か、中期の作品番号になっている。また、学習者向けということから、めったにコンサートでは聴かれない。これを初期作品の列に戻した児島新氏の功績は大きい。氏は、未完となり、作品28「田園」までとなったベートーヴェン・ピアノソナタ集にこの2曲を組み入れた。今回の杉谷のプログラム構成では、この流れを受け継いでいたことを評価したい。演奏も味わい深いものだった。

つぎに、作品10の1, 2. これも立派な演奏だった。この2曲は3楽章構成で、無駄がない仕上がりになっている。そんな中で、奇をてらわず、作品そのままの姿を伝えていた。休憩を挟んで、作品10の3が演奏された。これは4楽章構成に戻り、一段と緻密で無駄のない書法がとられている。杉谷は、このソナタがベートーヴェンの一つの到達点に至ったことを認識し、しっかりまとめていた。ことに、第2楽章の深い響き、歌は忘れがたい。最後は、作品13「悲愴」。これも円熟した杉谷のすがたを伝えていたといえよう。アンコールには、バッハ「イエスよ、私は主の名を呼ぶ」が演奏され、その深い響きは心地よい余韻を残した。

2003年1月19日、トッパンホール

二期会「カルメン」

2002年、二期会は、創立50年を迎えた。この記念公演として、ジョルジュ・ビゼー「カルメン」が上演された。今回は、飯森範親指揮、東京フィルハーモニー交響楽団、実相寺昭雄演出による上演だった。

実相寺の演出は、本来4幕構成の作品を3幕構成にして、ドラマを重視した舞台作りを行っていた。

このオペラでは、第4幕があまりにも短いため、3幕として構成することができよう。実相寺は、この点を捉えていた。

飯森の指揮は、冒頭の前奏曲の勢いをそのまま舞台に持ち込んで、ドラマに生气を与えたといえよう。それが、合唱、ソリストたちの持てる力を引き出すという結果となった。

合唱では、二期会合唱団の力強い、生气あふれる合唱がオペラを盛り立てた。この作品では、合唱の果たす役割が大きいゆえ、好ましい結果を生み出した。

小山由美のカルメン。奔放なジブシー女の生々しさ、荒々しさを押し出していた。福井敬のドン・ホセ。あまりにも生真面目すぎたゆえの男の苦悩を表現していた。松田昌枝のミカエラ。可憐な乙女でありながらも、カルメンからホセを救わんとする強靱さの表出に成功していた。

黒田博のエスカミリオ。闘牛士そのものでありながらも、伶俐な男の性格を描き出していた。他には、ダンカイロを演じた松本進、フラスキータを演じた小林菜美、メルセデスを演じた杉野麻美が印象に残った。

実相寺が3幕立てという、新しい解釈を打ち立てた上演は、成功したと言えよう。これは、「カルメン」解釈に新たな1ページを刻むだろう。この解釈が今後どのように受容されるか。これは、一つの課題だろう。

東京フィルハーモニー交響楽団 第671回定期演奏会
オール黨プログラム

東京フィルハーモニー交響楽団、第671回定期演奏会は、戦後日本を代表する作曲家、黛敏郎の代表作を取り上げた。指揮は、黛作品をはじめ、現代音楽を意欲意気に取り上げている岩城宏之、合唱は東京混声合唱団、栗友会合唱団であった。

まず、初期黨のモダニズム様式の傑作、トーンプロレマス55、饗宴、ニューヨークシティバレエ団からの委嘱作、舞楽。この3曲が演奏された。

トーンプロレマス55、饗宴は、初期黨の躍動的でエネルギーに満ちた演奏であった。ただ、饗宴は、後に黨が日本的な要素を取り入れていくための新しい試みがあるようにも感じられた。

舞楽は、1962年に作曲された。これは、涅槃交響曲以降の黨の作品では重要なもののひとつである。東洋の雅楽、西洋のオーケストラを融合しようとした試みた意欲作で、岩城は、黨の意図したものをそのまま引き出した。

いよいよ、涅槃交響曲である。黨は、この作品で日本的なものを確立したといわれる。また、岩城自身、この作品を初演し、何度も取り上げている。今回の演奏でも、岩城のこの作品に対する共感、黨への共感がひしひしと伝わった。合唱も力強く、荘厳さを出していた。

黨が1997年に亡くなってから、6年になる。生前、黨のナショナリストとしての言動には、かなり批判があったことは事実である。そうした黨の言動だけを取り上げて、「右翼的だ」と批判することには、決して同調できない。黨であれ、どんな人にも、生の面、負の面はある。そのような面をすべて含めた、黨の全体像を再構築することが必要ではないだろうか。その意味で、今回の演奏会は大きな意義があったといえよう。

2003年2月26日 サントリーホール

メールマガジン版『音楽の世界』2003年3月号

(完)
